



プロジェクト 1000人合唱リー

歌で人を励ましたい

北区のマスターが作詞作曲「草原」

歌で一人でも多くの人を励ましたい。一年半前、北区の酒場マスター、関周さん(65)は、作詞作曲した「草原」を一万人に歌ってもらう目標を立てた。病院や福祉施設、イベントなど約八十カ所を回り、二十五日現在、約三千九百人に歌われている。

「真っ直ぐに生きている 歩中、アスファルト脇に咲く雑 健気な君を空だけが ずっと見 草の花が目に残り、曲のイメ ージが膨らんだ。「苦しくて

北区の滝野川病院リハビリ病も、めげずに生きる人たちを、棟に歌声が響いた。ピアノ伴奏 都会に咲く花になぞらえた」とは関さん。お年寄りたちが、肩 関さん。それは自分自身の姿でを揺すって口ずさんでいる。もある。

「草原」は昨夏、作った。散 高校卒業後、山口市から上



関周さんの伴奏で「草原」を合唱する地域の女性たち＝東京都北区で

①リハビリ病棟で「草原」を演奏する関さん ②10月、区民祭りで 滝野川病院で ③11月、JRR日暮里駅前子どもたちが合唱 ④5月、長野県の草原で合唱 ⑤3月、東京・荒川マラソンで太鼓グループと共演(②-⑤は関さん提供)



昨年9月、アコーディオンをかっつぎ二人、路上で北区で(関さん提供)「草原歌い手」の認定証

草原
暖かい午後の 日差し浴びながら 少し汚れた 名も知らない君
アスファルトの横 コンクリートの隅 間からのぞく 小さな姿
「こんな所にどうしてだろう」 問いかけてみたけど 雨に打たれ 雪に埋もれ それでも光に向かっている
広い草原に いつかはきっと帰るだろう そう信じて 真っ直ぐに生きている 健気な君を空だけが ずっと見ている

※1番のみ。ホームページに全歌詞を掲載。「ミュージカント・アマネ」で検索できる。

どん底の時期に救いになったのが、幼いころに習っていたピアノ。二十年以上遠ざかっていたが、独学で二からやり直し、曲作りも始めた。病院などを回り、弾き語りをするボランティア活動も始めた。

最後のカラオケ店を閉め、近くに酒場「ミュージカント・アマネ」をオープンしたのは二〇〇三年五月。四十歳になっていた。「最後のとりで」(関さんの十条を再起の場とする)と迷いはなかった。

店にはグラランドピアノがある。関さんは「草原」を歌った人にデザインが一枚ずつ違う「認定証」を手渡している。認定証の草花の写真は、元カメラマンの木村松夫さん(65)が撮った。木村さんは「人生成功するのは一握り。ほとんどが雑草だ。それでも、この歌を歌っていると、生きていて良かったと思ふ」と話している。

同居する義母、施設にいる実母の二人を介護する北区の主婦、菅生三枝子さん(65)は「大きな声を出すことで、元気になれる」と話す。

関さんは「草原」を歌った人

京。三十歳でカラオケボックスに経営に乗り出した。首都圏に十店舗を構えるほどの勢いだったが、大手との競合で暗転。数年で次々と閉店に追い込まれ、最後に残ったのが、北区の十条銀座商店街にある店だった。

昨春から週三日、店で歌会を開いている。メンバーは中高年の女性を中心に約五十人。「草原」の歌い手として、イベントやボランティアに参加する人も多い。

文・鬼木洋一／写真・川北真三、石橋克郎／紙面構成・松島英二